



待降節第 3 主日 (ルカ 3:10-18)

救い主を迎えるため、「半分を分け合える人」になる

待降節第 3 主日の福音朗読で、洗礼者ヨハネの活動が朗読されました。ヨハネの活動はすべて、あとから来られる「わたしよりも優れた方」(3・16)に群衆を向けさせることでした。ヨハネの勧めはヨハネ自身が求めている勧めではなく、あとから来られる方が求めている勧めと言えます。

皆さんは会費を払っているものがあるでしょうか。私は3年このかた、会員になりたいのになれずにいたものがありました。ようやく抽選を突破しました。それは2022年のカープファンクラブです。当選したのもう死んでもいいです。いや、今のは取り下げます。私が当選したカープファンクラブは単年会員なので、毎年出直して抽選に応募しなければならぬのでした。死ぬわけにはいきません。

長い道のりでした。2015年くらいからカープが強くなりだして、セリーグで3連覇をしました。それと同時にカープファンががぜん増え、通常の継続会員枠に何年も空きがなくて申し込めませんでした。一時期は年間シートを買おうかとまで思い詰めていました。それから「単年会員」という枠が用意されたので抽選に応募し続け、4年目に抽選を突破しました。ようやく手に入れた枠です。大切に使いたいと思います。

さて福音朗読、ヨハネの最初の勧めを取り上げましょう。ヨハネは、「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」(3・11)と答えました。「分けてあげること」が勧められています。この勧めを実行することが、救い主を迎える立派な準備になるのです。

「下着を分け合う」の部分ですが、下着を持っていない人がいるのだろうかと思いつつも、下着すら持たない貧しい人がいたのでしょうか。二枚のうち一枚を分けるのですから、大きく言えば持ち物を半分与えるということです。

「持ち物を半分与える」と聞いて、何かを思い出さないでしょうか？これはザアカイの物語に通じます。ザアカイはイエスに声をかけられ、心を開いて答えました。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」(ルカ 19・8)

「半分与える」ということは、とても重い決断です。物の大小もあるかも知れませんが、それでも、半分ということは、自分と分け与える相手を同じ重さで見ているのです。「施してあげる側」と「施しをもらう側」という見方ではなく、「私は、あなたを自分のように思っています」というしるしが、半分与えるということではないでしょうか。

そうすると、イエスが命じた「愛の掟」にも繋がります。「隣人を自分のように愛しなさい」(マルコ 12・31)。ヨハネの勧めに耳を傾ける人は、イエスが高く評価したザアカイの回心にも、またイエスが求め

た「愛の掟」にも心を開くことになるのです。

私たちも、洗礼者ヨハネの勧めに耳を傾けるべきです。洗礼者ヨハネに耳を傾けずにあとから来られる救い主イエスに耳を傾けることはできません。実際、洗礼者ヨハネに耳を傾けなかった律法学者とファリサイ派の人々は、イエスにも耳を傾けることができなかったのです。

「そんなことをしたら生活が破綻するではないか」そう考えるかも知れませんが、考えてみましょう。半分を与える場面は、いろいろな時にやって来ます。「三笠山」というお菓子があるでしょう。小さな子供がいるとして、その子はあまりにも小さい子だから、一口だけ分け与えるでしょうか。

もし小さな子が「三笠山」を手にしていたらどうでしょう？その子はあなたに、そのお菓子を半分に割って差し出してくれるのではないのでしょうか？「相手に適した分量」で分け合うのではなく、「あなたは私と同じ大切な人」と考えているなら、半分与えるのではないのでしょうか。

ご降誕も、あと二週間です。父なる神は、私たちにその独り子を分け与えてくださいました。「あなたは私と同じ大切な人」と考えて半分与えてくださったのでしょうか？いいえ違います。「持っているものすべて」を与えてくださったのです。

この二週間、父なる神が、私たちを愛してくださったその愛の大きさを考えましょう。その愛の大きさに感謝して、私たちが、さまざまな場面で半分に分け合える勇気を願いましょう。「私と同じように大切な人」が自分にいるというのは、とても素晴らしいことです。

待降節第4主日(ルカ 1:39-45)